

野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信 野中 通信

砂野中佐は六月二十三日に自決し、空陸中尉は大里村方面の二〇三高地附近に突破して、当地で戦死したとの情報も後日に聞いた。

資料提供者

無線

東原 盛正 (一年生)

(旧姓 前外間)

暗号

長嶺 勝正 (一年生)

那覇市立商業学校鉄血勤皇隊

一、編成

昭和三十年三月三十一日頃、商業学校長(仲里朝章)を通じて四頭で、勤皇隊編成、軍要請があり、当日召集に応じられる範囲内(首里近郊)に居住している者に、学校からの四頭伝達があり、一、四、五年生一六名が校長宅(首里市当蔵町)に集合して編成された。

二、編成後の状況

編成と同時に、即刻首里市儀保町西森一帯にあっては独立歩兵才二大隊(石四二八三)末永中隊(大隊)に入隊し、左へとおりに配置された。

中隊指揮班

五年 宮城 淳(戦死) 五年 屋嘉比 紫章(生存)

〃 小嶺 幸政(生存) 四年 仲宗根 清栄(〃)

四年 山城 宏春(戦死) 〃 久高 唯松(〃)

〃 島袋 嘉善(生存) 一年 平敷 善盛(戦死)

八名

迫撃砲分隊

五年 大嶺 実(生存) 五年 喜瀬 貫哲(生存)

瀬嵩 政順(戦死) 〃 楠福 政藏(戦死)

商 勤

水 産

四年 渡久地 伊達 (生存) 四年 池宮 敏 (生存)

入隊と同時に一ツ星の階級章、軍服、肌着、帯剣、革靴、革帽が支給され、左の胸に白布に、鉄血勤皇隊と墨書し縫付けた。

入隊後一週間位は、軍人勲諭の暗誦、急造爆雷、手榴弾の使用法などの訓練を受けていたが、戦況は次第に悪化し、四月六日頃から学徒は陣地構築(主に夜間)、弾薬運搬、電話線、補修、大隊本部との伝令等の任務に服した。

昭和二十年四月中頃、首里市儀保町西森で陣地構築作業中(墓に銃眼をあける作業)、榴弾の直撃を受け、墓の天蓋が落盤し、兵隊三四名と共に学徒山城広春が戦死した。その翌日中隊長から山城広春は二階級特進せしめられたと聞いた。

昭和二十年五月二十日頃、中隊は首里市儀保町西森の陵線で浦添村沢岬方面(首里の北下方)から進軍して来た敵戦車と交戦し一台を破壊したが、戦車砲弾により兵隊四五名、学徒二名戦死、二名負傷の犠牲者が出た。

学徒の戦死者二名は二階級特進せしめられ、軍司令部から電話で表彰詞が送られ、中隊長は学徒に讀み聞かせた。五月二十日、犠牲者

者は左のとおりである。

- 浦崎 直義 四年 戦死
- 瀬崎 政順
- 平敷 善益 一年 右大腿部受傷
- 稲福 政歳 四年 頸部受傷

昭和二十年五月二十七日頃、首里の戦いが不利となり、南部への撤退を余儀なくされたので、中隊は概ね左の至路を辿って撤退した。

- 首里撤退(五月二十七日晩)——識名——一橋(南風原)——津嘉山(二泊、五月二十九日晩)——長堂(豊見城)——武富(兼城)——波平
- 潮平(五月三十日)——照屋——国吉(高嶺)——伊敷(真壁)
- (五月三十一日)——小波藏(真壁)(六月十九日)——广文仁

小波藏に撤退してからは、同地の自然壕及び岩陰を利用して、戦いを続けたが、六月十七日頃附近に敵が接近し混乱状態となった。

昭和二十年六月十九日頃、傷病患者は小波藏に死し、元氣な者だけ、新込隊を編成し、广文仁に移動し、同日夕刻より二十日の拂曉にかけて、前面の敵中に斬り込みを敢行したが、多数の戦死者を出した。生残りは同地海岸附近で敵に発見され、六月二十五日頃捕えられた。

資料提供者 久高唯勝 (当時四年生)

沖繩県立水産学校鉄血勤皇隊について。

一 編成前の状況

昭和十九年十月十日の空襲で校舎が全焼したため、住吉町や上泉町に
学校を開設していたが、生徒の集りが悪く昭和二十年二月初旬宜野湾
村農民道場に学校を開設したが授業未了の余裕がなく、同校当日か
ら宜野湾村在の石部隊環堀り、陸地構築等に三月二十六日協力した。

二 編成

昭和二十年三月二十六日三二連司令官沖繩縣隊区司令官沖繩県知事の
逕署による、沖繩県立水産学校鉄血勤皇隊を編成して、国頭方面球一八二
四部隊に入隊せよとの命令を授領したので、当時、教練教師仲村
渠守一連曹が編成に着手し三月二十七日編成を完了した。
小嶺幸進教練は県庁務課に仲村渠守曹は球部隊司令部に
報告したのち出発した。

三 その後の行動

昭和二十年三月二十八日水産勤皇隊員二十七名は、新崎寛綽教頭、親
川光繁教諭に引率され、国頭に向い出発、普天間一真屋、越来
一東恩納一石川一金武を至り三月三十日古知屋に着した。
同日、本部隊宇土部隊本部へ連絡員を派遣したところ、四月一日に
連絡員は部隊にその報告によると、球一八四部隊とはない、宇土部隊

は司令本部 指示命令もなく受入、準備も出来ていないこと
のことであった。そこで同日さらに宇土部隊へ連絡員を出し、四月二
日帰隊したがその報告では「恩納にある護郷隊かも知れない」とのこと
が分った。

四月三日一応解散したが、新崎教頭以下二五名は恩納岳護郷隊に
向い出発、四月五日恩納岳へ球一八八四部隊に到着。そこで水産勤
皇隊である旨を話したら大変喜んで迎えてくれた。部隊では何
時来るか、何時来るかと待ちかねていたとのこと、始めて球一八四部隊
は間違いで、球一八八四部隊であったことが判った。

同日、新崎教頭以下一五名は二等兵を命ぜられ、情報蒐集や陣地
構築、彈薬運搬、食糧運搬に従事した。
新崎教頭、金城、岡 他一名は本部付となり、他は各中隊に分散
入隊した。

入隊当日は彼我攻防戦、最早で午前九時入隊し、日暮迄安全地
帯に待機命令を受け待機していたが、同日の攻防戦で才三陣地は
殆んど破壊され、南后の戦いは不利のため同陣地を放棄、才
二陣地へ移動命令を受け移動、同夜才二陣地に到着、意に
夜を徹して彈薬、糧秣の強行運搬に服した。

才二陣地の構築は殆んど未完、成りたため、昼夜に分れて陣地構築
に従事したが、数日間、戦車および擲弾筒攻具を受け、陣地構築
築も不能となり従うに人員を損耗するだけであった。

四月下旬頃に讀谷飛行場大隊の生存者約二ヶ小隊(八〇名位)は、柳
中佐の命により岩波隊に編入され、仲間部落(恩納)の海軍二階堂
隊(約一〇〇名位)、同海軍部隊末広隊と共に恩納岳才三陣地に結
集、金武飛行場、恩納滑走路、伊藝部落在、米軍輸送隊の
攻具を開始した。

五月初旬より米軍の反撃は漸く激烈を極め、毎日朝八時頃から日没
時迄、各山岳の掃蕩戦が行われた。
五月下旬頃、岩波隊本部の所在地が察知された模様で、集中攻
撃を受け多数の死傷者が続出した。

五月三十一日保管食糧も残余少なくなったので、国頭移動を決定、同
日各隊とも移動準備をなし、午後五時頃戦傷者は軍医が診
断の結果、死を免れぬ者は銃殺し、漸く生きを保てる者は食糧を
与えて残留させ、歩ける者は片端から行動を共にするよう命令
があった。

各隊病院前に於て傷病者(残留者)の元気回復と、銃殺された者
の冥福を祈り、断腸の思いで悲涙にむせび下り別離を惜しんだ。
出発の際に岩波隊以外の各部隊は自由行動を許され、本隊
は六月一日深夜に移動を開始、途中必死の行軍を続けて、七
月一日丸一ヶ月で久志村有銘に到着、七月十五日頃各隊一応解散した。

△金城邦岡二等兵の戦死状況について

昭和二十年五月十日、米軍は金武眼鏡山に陣取り、恩納三角山にある我が方の陣地を攻襲して来たので、總反襲に移り双方の巨砲約二五〇米になった。

五月十一日の未明から漸く交戦激しく戦死者が多集続出した。本部より三中隊へ島袋伍長以下五名応援命令により出勤後、金城邦岡二等兵は直ちに立哨勤務に服したが、約三十分後戦車砲弾破片により、頭部顔面に重傷を刀貝い病院に運ばれたが、出血多量のため間もなく戦死した。

△新崎境緋教頭の戦死状況について

昭和二十年六月一日、球一八八四部隊岩波隊は恩納岳より国頭に撤退すべく行動を開始したが、翌六月二日金武飛行場入口突破の際(右后十折頭雨中)、米軍監視哨に発見され、猛射を浴び新崎教頭は胸部貫通銃創を受け戦死したが、他にも数名の戦死者があった。

通信隊の行動状況について(沖縄県立水産学校)

一 編成前の状況

昭和十九年十月十日の空襲で学校が全焼したので、各自郷里へ帰り最寄り、量に協力することになった。学校近郊の者は、垣花台上の高射砲陣地並に那覇港在り船舶への燃料補給等に協力した。

二 編成後

昭和二十年二月初旬、宜野湾農民道場に集合して学校を開設同時、宜野湾在りの石部隊に協力、戦車壕掘り作業を任された。その作業に従事中、水産通信隊を編成し(二月四日四〇名位)、編成後は球部隊から派遣された下士官によって通信教習月を受けた。教習月の内容は九九式電話機、取扱法、野線、架設工事、切断接続修理についてであった。この教習月は三月二十八日まで続行された。

三 編成後の状況

三月二十八日、球一六一六部隊通信隊から学徒受領のため、下士官が来校し、各自に一日二日の暇を與えて父母の下に帰され、父母の承諾を得させた。その時、若し出校しない場合は憲兵隊に押えられ、四月一日までに首里へ、球一六一六部隊司令部に集合するよう命令を受けて帰郷した。

三入隊

四月一日陸軍二等兵として塩販が支給され、量装具一切を支給さる。中村中尉の指揮の下に入隊式を行つた。その時、人員は二十二名で、後分隊長は瀬尾正賢であった。(球一六六部隊司令部情報部入口の壕内)

入隊後は壕内で通信兵と共に通信業務、監視等の任務に振された。監視哨に下士官一名、兵一名、通信隊一名で、物見台に擬装して身を固め、敵状態を監視して、有線電話で壕内に報告した。又監視哨から壕までの電話線が一日数回切断され、その補線にも従事した。

この勤務は三交代制で、他の者は通信兵と一緒に前線部隊との通信連絡その他雑役に従事せしめられた。

この勤務は五月中旬頃まで続いた。この間犠牲者はなかった。五月七日通信隊が繁多川で電話線架設作業中、至近弾を受け、東門智秀が頸部から飛ばされて即死、大嶺盛一は腹部をやられ、十四五分後戦死した。当日は艦砲が激しくて死体を処置するこが出来ず、翌日未明に埋葬した。

五月中旬頃、先発隊として广文仁方面に転進の内命を受け、重要書類を運搬することになり、某少尉の指揮で学徒から四名(三年生で体々大きい者から)、防衛隊

十五名、計約二十名位でその任に当り、首里を出發後三日目に全員無事广文仁部落に到着、民家を接收して宿舎にした。

後続の水産通信隊は全員無事广文仁に撤退完了した。

广文仁までの撤退至路は、夜間のため詳細不明であるが大体次のとおりと記憶する。

首里——津嘉山(海)——東風平(海)——興座——新垣——广文仁

广文仁到着後は殆んど食糧収集が主任任務であった。

六月初旬頃から各部隊が广文仁に転進して来たので時々艦砲射撃があった。

五月中旬頃から六月初旬まで麻文仁の民家で待機していたが、身の危険を感じたので壕に移動した(健見、塔、壕で司令官が自決された壕の近く、壕)。

壕に移動して後は六月二十日頃迄食糧収集の任務であった。

六月二十日夜中各水隊は分散し特編中隊を編成した。中隊長は大尉であった。

六月二十一日、五名が選抜されて、重要書類を具志頭の海岸から大島の輿論島へ運搬すべく命令を受けた。これは麻文仁附近および具志頭海岸の周辺の状況が良く判る左記五名が選抜された。

根神谷、盛輝（津堅出身）、宜保、幸栄（平安屋出身）、
 安谷屋哲雄（平安屋出身）、玉栄、福栄（
 比嘉 武儀（読谷出身）

この五名は司令部へ行き、其参謀に引寄せられて輿論に向け出
 発したと推察されるが、その後消息不明（壕の入口で別れた）、
 詳細不明

六月二十二日、總攻襲の際には一小隊の指揮官は中尉であった（氏名
 不詳）

金城正俊、当真嗣冠、渡嘉敷俊彦、渡名喜守敏、上前寛市、
 玉城信市、瀬底正賢（生存）の六名と、下士官、兵若干名が广文仁
 部落の敵攻襲のため、同日午前〇時五期して決行したが、敵の攻襲
 に抗れきれず、未明軍司令部の壕に退却して来て壕入口で守
 備に服した。

その時敵の馬乗り攻襲を受け、銃、爆雷、ガソリン投下、火雷
 放射器を打込まれて壕は落盤し、通信隊は全員生埋めとなり
 戦死した（午前十時頃であった）

六名は戦死して自分は石と石とに挟まれ、吐血したが、どうやら抜
 け出して長参謀にその状況を報告したら、牛島閣下から壕の入

口を死守せよとの命令を下さられたので、自分は復唱して壕の入口
 出て行った。その時閣下は何か手帳に記載して居られたのを今で
 も記憶している。

その後自分は壕入口で意識不明で倒れた。数時間位後に気を
 取り戻した時は誰も生きてはいなかった（中尉中尉は馬乗り攻襲
 寸前に銃銃過で戦死された）

その二小隊の行動は詳細不明であるが、その一小隊と同時刻頃、
 稲福栄次郎、照屋清永、喜屋武盛徳、当間嗣雄、玉那霜宮

和、照屋栄雄、真志喜朝輝、上原栄幸の八名は、總攻襲の
 際敵に包囲され、广文仁高地の壕（燈籠の塔）へ退却したが敵の反
 襲に会い、火焰放射機で壕の周辺は火の海と化し、その壕で焼死
 したものと思われる。

自分は六月二十三日夜中頃正気にかえり、六月二十四日未明壕から脱
 出して广文仁海岸から、具志頭へ行くに算ずであったが行けず、广
 文仁と米須の中間の海岸に戻り、そこで一人の下士官（後藤重曹
 といった）に助けられた。二日間位世話になつて後、海岸の土の壕に入
 り、食糧を集めてはその壕に運び、十月初旬までその壕の中
 で待機していたが、十月初旬C/D情報を知り、知念地区
 百名の収容所に収容され、二日位して屋嘉に送られ、十月二十八日
 釈放される

宅した。

資料提供者

与那原町当添三三班

瀬底 正賢 (当時二年)

勤皇隊本部の行動状況について (沖縄師範学校)

昭和二十年三月三十一日本部員一六名は球一〇一五八部隊所属となり留魂壕を根拠として、軍司令部からの命令を各配下部隊へ伝達する任務と、隊員の衛生および給与(炊事)自活すべく食糧蒐集等に從事。
野田校長、井口配属將校、平田生徒隊長、その他四五名の教職員と共に、廣文仁へ撤退するまで首里にあって任務を遂行。

五月二十七日晩十時頃、軍司令部の壕に全員集合を命ぜられ、即日廣文仁への退却を伝達され、同日晩十一時頃首里を出发、識名、津嘉山(一泊)を經由、二十九日の夜明け兼城村の加賀敷に到着した。日中の行動は甚だ危険なため、賀敷で日中を過し、三十日の晩に出发、翌三十一日の夜明け方廣文仁に到着した。
廣文仁における本部の任務は、首里における任務と同様で、

六月の中旬まで続けられたが、六月十七日頃から廣文仁方面も殆んど米軍の包囲するところとなり、晝夜間の別なく陸海から激烈な攻襲を加えて来た。食糧は欠乏し、武器は悉く破壊され、戦力は更に薄れかけた。晝間は壕内に潜み夜間にも来りて食糧の獲保に出る有様で、指揮系統は完全に紊れた恰構になっていた。矢先、六月十八日か十九日頃軍司令官は「敵中を突破して国頭で再起を計れ」と配下部隊に命令された。野田校長から細心の注意を受け六月二十日午前二時頃、生残りの者は三々五々に敵中を突破すべく廣文仁を後に訣別した。

野築二中隊の行動概況について（沖繩師範学校）

昭和二十年三月三十一日頃、約八百名位が首里市留魂壕のオニ野築オニ中隊に入隊した。

入隊後は二交替制で軍司令部の壕垣り（首里金城町）、糧秣受領、伝令、立哨、その他雑役等の任務に服した。

編成左のとおり

中隊長 大尉 だが氏名は記憶にない。

オニ小隊長 洞井中尉

オニ小隊長 松本中尉

オニ小隊長 高木中尉

二十年五月初頃龍魂壕より他の中隊と共に金城町の自然壕に移動して前記同様の勤務及び独工六六大隊の応援勤務にやう北南風原村山川、西原村池田方面の橋梁道路の修復作業等の任務に服した。

今年五月二十八日頃の晩首里の戦いが不利となり南部への撤退を余儀なくされたので中隊は各分隊毎に分散して概ね左の聖路を辿りて撤退した。

首里撤退(五月二十八日晚)——識名——日橋——津嘉山(五月二十九日)
 長堂(豊見城)——高安——平良(豊見城)——賀数(兼城)
 大里(高嶺)(五月三十日)——米須——小渡——广文仁(五月三十日)
 (六月二十三日頃まで)
 广文仁に撤退してからは中隊員は同部落東南方广文仁岳
 台上の自然壕や岩蔭に入り、其処では近くにあつた軍司令
 部の自然壕(牛島閣下が居られた)の改修作業、糧秣蒐
 集、彈藥運搬等の任務に取られたが、六月十八日頃野築本部
 から斬込隊参加の命をうけ、一部が参加したため死傷者を出
 した。
 同年六月十九日頃、戦況が不利となり、附近に戦車の轟音か
 聞えるように存つたので、軍司令部より、隊は一応解散して敵
 中を突破して国頭へ集結せよとの命令があり、手榴弾三
 個宛支給され、中隊員は数名で組をつつて同日晩壕を脱
 出し、具志頭村海岸俗稱ギーザバニ夕近くまで、前進して
 いった。その間にも相当の犠牲者が出たと思われ。

同年六月二十二日頃、夕刻更に国頭突破のため同地を脱出して
 同村与座部落近くまで到達した。一部隊員も、敵の攻撃を受
 け戦死者を出し、生存者は同地にて米草に収容されたが、
 中には南風原村方面まで突破して米草に収容されたもの
 のもいる。

資料提供者

楠福源吉

第五砲兵司令部の行動状況について（沖縄県立一中学校）

鉄血勤皇隊一中隊から球九七〇部隊（五砲兵司令部）に所属された学徒は、昭和二十年五月十四日頃、各部隊に配属になったが、約二〇名は其儘に五砲兵司令部附となり、首里市金城町記念運動場南下の同部隊に入隊した。

入隊後は五哨（米軍上陸後は一中線浦添方面との有線連絡）炊事、負傷者の看護、輸送（南風原陸軍病院間の輸送）、雑役等に服した。（和田中尉が主として学徒の任務割当をしておいたと思う。）

首里の戦いが不利になり五月二十七日頃三三軍司令部および各部隊が南部へ撤退のあと、壕内の整理と陣地の爆破をした後、五月末頃、五砲兵司令部は首里を出発、識名、日橋、東風平を全て和田中將以下全員雨中の徒步行軍を続け、翌朝九時頃、文仁村波平に到着（兼城附近から夜が明けていた。その間には部隊は損害はな

かつたように思われぬ。全員疲労していたので隊伍も崩れ

て先尾の間は約一里の距てがあった。今地で二三日民家に宿泊。(その間部隊は何もしなかった) 従事したほか、爆雷の運搬、雑役等に従事した。

六月中旬頃から砲弾が激しく飛来した。六月中旬頃学徒の戦死傷者が出た。(嘉数英月戦死、大城真順、山田義邦 負傷)

負傷者は上宿の命により壕外の空墓穴に移され、放置されたが、負傷者(大城真順)が二三日を過してから、墓穴から出て水を求めに廣文仁海岸の岩井戸に向った時は、部隊は全滅したのか、さきき居た自然壕にはいなかった。その間、米軍に対する反撃斬込と、国頭突破を目的とする分散斬込等に出たと思われぬ。

(以上資料提供者 大城真順)

六月十日過ぎ頃から砲弾が飛来して一部学徒の戦死傷者が出たが、六月十七日頃から米軍が廣文仁方面に進攻して来たので、部隊は翌日頃から殆んどが斬込に参加、学徒も斬込に出た。儘還らず、六月十九日頃(和田司令官自決後)最後の斬込を命ぜられた数名の学徒は、鬼武中尉の指揮により斬込に出たが、米軍戦車と歩兵に包囲され、全滅状態となり、僅かの凹地に負傷の儘意識不明となつて、米軍に收容されたため生存した学徒(山田義邦)は、屋嘉收容所、ハワイ收容所に收容された後、浦架聖由帰郷

(以上資料提供者 山田義邦)

独立工兵第六六大隊配属の行動状況について(沖縄県立第一中学校)
 昭和二十年三月二十七日、欽血勤皇隊第一中隊が編成され、才五砲兵
 司令部所屬となつたが、五月十四日に勤皇隊から教官新垣
 龜英(陸軍伍長)以下学徒約五〇名が、首里市金城町(一
 記念運動場南下方)に在つた工兵第六六大隊(長植松大尉)
 に転属になつた。

当時は米軍の空襲並びに艦砲が激しく、部隊の同一行動の困
 難と任務の関係上、転属後は二、三名宛各分隊に配置され
 陣地も各分隊毎に分れた。そのため中隊長、小隊長の氏
 名は記憶になく、直接指揮は何れも下士官(主に軍曹)が
 とつていた。

分隊によつては学徒の配置され、分隊もあつた。
 主な任務は陣地構築、糧秣運搬、伝令、その他雑役であつた。
 五月二十七日頃、首里の戦いが不利となり、南部への撤退を
 余儀なくされ、部隊は分散して概ね左の聖路を出て撤退し
 た。

首里撤退(五月二十七日晩) — 繁多川 — 識名 — 真玉橋 — 高安

—武富(六月五日晚)—賀敷—座波—大里(高嶺)—新垣(眞壁)(六月十二日晚)—小渡(天文仁)

小渡到着後は、北方高地の丁字形の自然壕や、附近岩陰を利用して、食糧の蒐集、彈藥運搬、患者の輸送手当、および戦死者の埋葬等の任務に服した。

六月二十日の昼頃、附近に米軍が接近し、同壕附近に機銃掃射を浴びせられた。

同日夕刻、部隊は前面の敵中に斬込を敢行して、その隙に、ついでに國頭突破せよとの命をうけ、夜間敵中に斬込んで、死者が多数出た。

資料提供者

- 西原村守翁長 城間期一
- 宜野湾村字上原 仲本賢心

第六師団通信隊有線中隊の行動状況について(沖縄県立第二中学校)

昭和二十年三月二十六日、通信教育を受けた学徒約五〇名は、首里工業学校在のオ六二師団有線中隊に入隊した。(引率者は同部隊氏名不詳の曹長)

同日、軍服や装具一切が支給され、小銃は豊富にあったので、選んで受領したほか、手榴彈二個も渡された。

最初学徒は「特別防召」と呼ばれていたが、二、三日後に階級章を受領してからは「何某二等兵」と呼ばれた。

入隊後は各分隊に配属になり、一般兵と同様配線訓練と、軍用語の電話連絡の教育を受けた。

指揮官および係官は左のとおりであった。

- 中隊長 田村中尉
- 小隊長 吉武少尉
- 山本中尉
- 朝比奈少尉
- 向日野曹長
- 石田伍長
- 本部附

某 伍長

昭和二十年五月初頃、学徒は分隊別に、嘉手納方面から進
 攻する米軍を退、任をうけた石ニニ大隊と、山のケ大隊(部
 隊名不詳)に派遣され、同部隊から豊見城にあった球、重
 砲陣地に有線電話で後方掩護射撃をさせる任務に当た
 が浦添、仲間、前田附近まで進出した時は米軍の進攻が
 急で、同部隊は相当の損害をうけ、学徒の戦死傷者が
 出た。派遣分隊は再び部隊に復歸した。
 首里の戦いが不利となつたため、五月末の晩に部隊は分散
 (分隊別に)左の全路を辿つて南部へ撤退した。
 首里——津嘉山(翌日未明到着、晩出発)——豊見城長堂——
 高嶺——真壁伊敷(馬場附近)壕に四、五日滞在)——山城
 (山城に到着した時は無線中隊は既に到着していた)
 山城到着後は戦準備のため、配線の段取りや壕掘
 り、炊事に従事したほか、各部隊と連絡に努めた。その間
 比較的元気のある者は、津嘉山方面から弾薬、食糧の運搬
 に従事した。

六月十七、八日頃米軍は真壁方面に進出して来たので、岩蔭や
 自然壕を利用して、更に南部に後退し乍ら戦いを続け、学
 徒は分隊毎に殆んど全員が、小型急造爆雷を抱えて、主
 として米軍戦車に対する斬込に参加せしめられたが、山城伊
 原、東辺名、小須一帯に於ける戦死傷者が続出し、部隊
 も組織を失つたため、六月二十二日国頭突破を目的として
 最後の斬込に出て行った。
 負傷者は、文仁海岸方面で米軍に收容されたのがいる。

資料提供者

漢那憲三
上原真栄

第六二師団野戦病院配属者の行動状況について
(昭和高等女学校)

那覇市崇元寺町(崇元寺橋附近、安里川畔)に在った昭和高等女学校は昭和十九年七月頃、校舎の二棟三教室が武部隊の弾薬倉庫に使用されたので、学校東北方の崇元寺に学校を移したが、十月中旬頃、第六二師団野戦病院から森田大尉、車田中尉、小池中尉、曹長二名が交互に来校し、三四年生(約二二〇名)に対して、毎日午後から衛生予備教育を実施した。

科目の担当は、森田大尉が内科、車田中尉が瓦斯防護、小池中尉が外科、曹長二名は救急法(人口呼吸のやり方、繃帯の巻き方)であった。

予備教育は昭和二十年一月下旬迄全校で続いたが、(一部の者は与那原国民学校で一週間教育をうけ再び归校)二月上旬頃、全部隊の要請により、首里市赤田所民家に合宿させられ、女子学徒約八〇名は本格的看護教育を三月五日迄受けた(教育の場所は赤田所の山城病院)。

教育は殆んど実地教育で切解手術の立合、指導も受け、
負傷兵に対する加療にも当った。

赤田に合宿時の給与は最初は全部隊から供せられたが、
其後学徒だけ自炊するように云われ糧秣まうけ自炊し
た。

三月六日、首里高女生も一緒に、正式に軍属(看護婦)として
全部隊に入隊し、班も組織され、班は八ヶ班に分れ、班長は学
徒の中から萩原中尉が指名した。昭和高女の学徒は七班と
八班に所属された。

入隊後は毎朝五時(七時)の時、宣城、遙拝、軍人勅諭の誦
読、后、訓示まうけ、日課は衛生兵令様の任務に服し、外出
も許されなかった。

三月二十二日頃になつてから、家族との面会を許されたので、
家族と面会に行ったが、艦砲、空襲が始まり、帰隊しないの
もあつて全部隊には四、五名位が残つた。
面会に行った者の中には、帰隊出来ずに日取寄の部隊に入つ
たものもある(例一山三四七五部隊に四名入隊、二名戦死、資料提

供者 佐久間フミ

四月中旬頃、浦添方面の戦いが激し、頃、部隊は首里高女真
和志村識名の壕、赤田の壕の三ヶ所に分れ別個、行動に移
つた。(昭和高女は赤田の壕と識名の壕に移動)

○ 識名の壕に移つたもの、行動

識名に移つたのは全部隊才八班(学徒班長山川マツ、隊員
約二〇名)に所属して、たもので、隊長は森田大尉(五月二十日
頃迄、其後は蓬江中尉が交代)、下士官二名、衛生兵一名、
一五名、一般兵一名、看護婦七名、婦長は与那原出身の
坂田トシ、防召兵七名と学徒看護婦一名であつた。
任務は患者の収容と治療に當つていた。

首里の戦いが不利となつた五月二十六、七日頃、軽傷患者は單
独、或は防召兵の付添で後方に移動せしめ、重傷患者約三〇
名は、五月二十九日隊長、命により、衛生兵がクレゾール原液
の注射で処置し、今日晩隊は津嘉山を空けて兼城村、武富の
壕に二泊、三泊、仁村米須に移動、全地に一泊、伊原の立

陵にある假壕に移動。

伊原の壕に移つてから患者の収容、治療にも当らないう、壕前を歩行する患者の要求によつてのみ治療に當つて

いた。
六月十三日頃空爆で伊原の壕が破壊されたので、部隊は分散の形で部隊全部を収容する壕がなかつたため、転々として壕を移り変り、六月十七日頃、本部が移動して入った米須の壕に移り合流したが六月十九日晚、兵隊は斬込に出るから、軍属は自由行動をとるようにと、解散命令が出たので、看護婦初め、学徒も各自の行動に移つた。

資料提供者 決元 マサ

(改姓 福福)

○赤田の壕に移つたもの、行動。

才七班(学徒班長 汐平美枝 隊員二〇名)に所属していたものは、赤田の壕にある全部隊本部勤務となつたが、壕に入

つてから殆んど病室附となつた。

首里の總攻戦が失敗後、戦傷患者も増え、戦況も不利となつたので、部隊も撤退命令が出た。五月十九日から二日間になり三組に分れ、夕刻に軽傷患者(独歩患者)は歩行させ重傷患者は衛生兵が背負い、或は担架に乗せて壕を出發、首里―新川―山川―外間を全て、兼城村武富に後退。生存見込みない患者は後退最後の日の五月二十一日に衛生兵が処置した。

武富に移動後は自然壕(墓地として利用してあつたもの)の中には骨壺がいくつもあつた)を利用して、首里から一緒に退つた患者約二〇〇―三〇〇名位の治療に當つた。

病状が悪化して生存見込みない患者は、衛生兵が注射器で処置した。

全地からは衛生材料の補給が困難となり、汚れた繻帯等は学徒看護婦が砲爆下の中を、井戸で洗濯して再使用した。六月三日の日没後、部隊は患者と全員、武富―座波―真壁―伊原を全て米須に夜中到着。

米須到着後は自然壕に入ったが、同壕には他の部隊も入って
いた（石部隊架屋支隊の生存者もいた）

全地では収容中の患者の治療のみにも当っていたが、軽傷
患者は逐次所属部隊に帰したが、六月十日以後、恢復
患者は衛生兵と共に斬込に出遣したものもいる。

六月十七日に伊原にいたオ八班の学徒を含む隊員も本隊
に復帰して来た。

六月十八日夜、ひめゆり部隊が、米軍の火焰放射器によつ
て壕内で全滅したという情報が出て、更に二十日の未明に米
須の壕にも、米軍戦車が攻襲して来るとの情報が出たので、六
月十九日の晩、部隊は解散命令が出て、軍属は自由行動
をとるようになり、いよいよ、今日晩は飯も兵隊が焚き、水も海
岸にある湧き清水を汲んで来て、学徒に対して最後の接待
をして、缺別の言葉を交したのち、学徒を含む軍属は各自
の行動に移った。

資料提供者 汐平 美枝
(姓氏諸見州)

第二四師団オ二野戦病院(山ヲタラ部隊)配属者
の行動について (積徳高等女学校)

昭和十九年十月十日の空襲後、一般学課の授業は停止され、軍の
要請により、専ら、那覇市垣花、真和志村天久および上間の高射
砲陣地造りや、真和志村国場の戦車壕掘り作業に従事していた。
昭和二十年二月初旬頃から部隊名不明の軍医中尉等三名が来
校し、四年生に対して、作業の合間々々に衛生救急法の三看護教
育を実施した。

二月二十三日、四年生五五名は軍の要請により、東風平村東風平国
民学校に、県立オ二高女生と共に合宿し、三月三十一日迄本格的
に衛生学の教育を受けた。

合宿者は六ヶ班に分れ、一班から三班迄は積徳高生、四班から
六班迄は県立オ二高女生であった。
班長はオ一班は土肥伍長、オ二班は高木林伍長、オ三班は宮田伍長
がたり、その下にオ一に学徒、班長が指名され、津波古ツルが
オ二班、保久村アキがオ三班、前田トミがオ四班の班長になった。
合宿時の内務教育は、軍隊全様で、衛生学の教育は、主に米